近江商人の知恵と理念を現代に生かす情報紙

三方よし（さんぽう）

第45号
2020／3

北前船主の館全景（福井県南越前市）
北前船主として幕末から明治にかけて活躍後、倉庫・保険会社の設立へと近代化へ進んだ右近家の歴史を伝える「北前船主の館」全景。写真右上、裏山の中腹には昭和10年、お助け普請で建設されたスパニッシュ様式の洋館が見える。

近江八幡市円満寺に奉納された住吉屋（西川伝右衛門家）の所有船の雄姿（円満寺蔵）

CONTENTS

北前船主から保険会社設立へ　右近家を訪ねて …… 2
北海道開拓に挑んだ近江商人 …… 5
出前講座 近江商人から学ぶ「三方よし」流 環境経営 …… 6
北海道で活躍した実業家「石橋彦三郎旧宅」 …… 11
お知らせ …… 12

北陸船主から保険会社設立への軌跡に学ぶ

～南越前市 北前船主の館「右近家」を訪問～

本年「北海道150年」記念式典が開催されることもあって、2019年、2020年にかけて北海道における近江商人の足跡を学習しようと2019年4月7日に福井県南越前市の「北前船主の館」を訪問した。本紙ではその報告と近江商人の北海道での活躍の一端を紹介する。

南越前市河野湾の復元北前船に乗り込んだ参加者たち
平成５年「歴史と文化の町おこし事業」で北前船を模して制作された

蝦夷地との交易の始まり

敦賀・小浜の船持豪商と松前藩

日本列島の北の大地を北海道と呼ぶようになったのは明治2年（1869）開拓使が置かれたころからで、それ以前は蝦夷地と呼ばれており、江戸時代初期に北海道の西南端の一部に松前藩が置かれるようになるまでは、広大な大地はアイヌ人の楽天地であった。

この時代に北海道松前藩での再生産を支えたのはアイヌの人々であった。藩ではアイヌとの交易に必要なものを入手するためにも本州との交易が必要となり、蝦夷地の産物は敦賀や小浜の船持豪商によって積み出され、その収益は藩の重要な収入源となっていたので、松前藩はこうした商行為を一手に引き受ける商人団の登場を期待していたらしい。ここに近江商人が蝦夷で活躍するシナリオができたといわれる。

蝦夷地に出かけた近江商人

藩士自らが商行為を行っていた蝦夷地に、天正16年（1583）蔬菜種子を持ってきたのが、柳川（彦根市）の田付新助とも、建部七郎右衛門ともいわれる。

松前や江差に入った近江商人の99％が八幡と柳川・薩摩の出身者であり、その時期はおおよそが寛永年間（1624～1644）に集中している。彼らは「両浜組」を組織し、北海道の開拓を行いつつ、地域間の商品の価格差を巧みに利用するいわゆる諸国産物回しで、北海道と上方などの大消費地の間での商品流通によって大きな利益を生んでいった。この時の物資の輸送には北陸の船を使っていた。

時代は下るが、豊郷の藤野四郎兵衛が松前に渡ったのは寛政2年（1790）、すでに両浜組の勢力が次第に衰えてきた頃である。四郎兵衛は、松前からさらに奥地の釧路・十勝・根室方面の漁場を商圏とし、建網を改良し、以前からの漁法を大きく進歩させて、文政12年（1830）には、廻船事業に進出し北前船7隻を持つまでになったが、そんな藤野もはじめは北陸の船を使っていた。石川県加賀橋立には藤野四郎兵衛家を「御本家」

右近家と肩を並べる大船主の中村家、重要文化財の指定を受け、現在修復中

道筋に沿って連なる右近家の蔵

と呼ぶ家が6軒もあり、四郎兵衛は、北海道と上方の交易に北陸の船と賃貸契約を結んで利用していたのであった。

北前船と北陸の船主

北前船とは

北前船のよび名については、日本海諸港の船が瀬戸内や大坂港にはいった時に、阪神の人がよんだ呼び名であり、天正7年（1579）安芸の武将吉川元春が厳島神社への戦勝祈願で「今度、北前之弓矢本意に任す……」が北前の言葉が使われた最も古い記録という。

瀬戸内では日本海側を北前とよんでおり、瀬戸内や阪神から見て北前は日本海側の陸地を指す言葉として使われていた。日本海側では、日本海から瀬戸内を廻ってやってきた船を「北前船」と称することはなかったが、大都市の人々の呼び方がいつしか定着したらしい。

日本海側の北陸地方では、日本海を航行する船を「弁財船」「千石船」「どうばらかき」とよび、北前船は北国の船主の持船で日本海から下関をまわって大坂にはいってくる船を指しているのであった。

つまり、北前船は「日本海と瀬戸内海をつないで、大坂と北海道の間を商売をしながら廻る買積船で、その船型は北国船・はがた船・べざい船から西洋型帆船におよぶもの」と定義（『北前船とその故郷ふるさと』）されている。

近江商人が北陸船主を雇って北海道から上方へ物資を運んだ船は、型式はさておき、システムとしては北前船ではないかも知れない。しかし、北陸船主が活躍する以前に自前の船を持ち、日本海航行で諸国産物回しを行ったのが近江商人であった。

荷所船と買積船

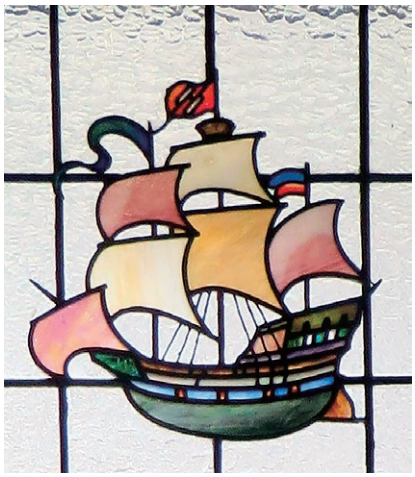
江戸時代以前には、日本海を航行した北陸の船主の中には船持豪商がいたが、近江商人が北海道で活躍を開始した当時、北陸諸浦の船は、船を提供して船賃を得る賃貸船で、これらを「荷所船」という。

江戸時代後期、北海道に近江商人以外の商人たちがやってきて次第に近江商人の独占が崩れ始めた頃、情報の発達などで地域間での価格差も重要でなくなってきて近江商人は次第に北海道を去り、北陸や瀬戸内の船主たちが輸送手段（買積船）を持つ商人として台頭してきた。

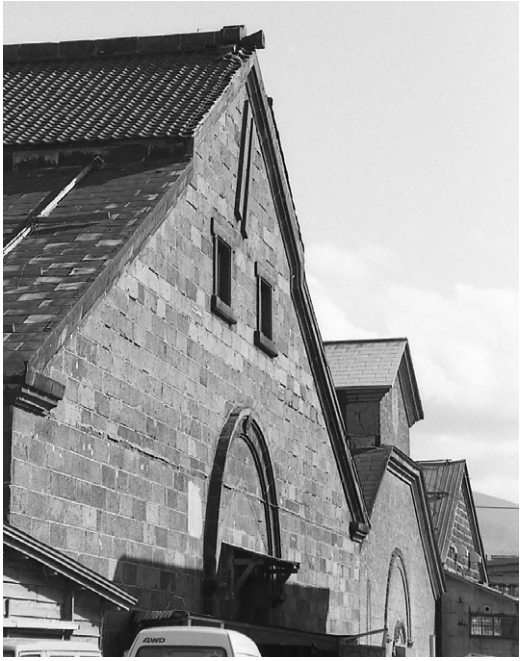
江戸時代の右近家

延宝8年（1680）に船1艘を与えられて分家したことに始まる右近家は、その後近江商人の荷所船として元文から宝暦にかけて松前と敦賀・小浜を結ぶ日本海を航行していた。天明から寛政期の右近家の「万店おろし」では荷所船として活動するかたわら、自ら商品を仕入れ販売する「買積み商い」を行うようになっている。

持ち船が弁財船1艘だけだった右近家は、寛政12年（1800）には江差沖で破船し、船を失うと同時に積荷の商品280両余の損失を被っている。こうしたリスクを抱えながらも、全国各地の情報を収集する一方で廻船経営のノウハウを身につけ、9代目は大坂の問屋商人と廻船業を共同経営し、文久3年（1863）には廻船数11艘、利益は1200両に達している。幕末から明治初期にかけて北前船が一番活発な活動を展開した時代のことである。



洋館２階のステンドグラス



北陸の船主らの倉庫が林立（小樽市色内３丁目）
手前から右近倉庫、広海倉庫、増田倉庫（1990年撮影）
（撮影：駒木定正）

玄関横の西洋式花壇。写真左奥が「どっときたまえ」が入る建物

現在の右近倉庫（東側）1996年に修理が行われている
（撮影：駒木定正）

北前船経営の転換期

明治も半ばになると鉄道や道路など陸上輸送の施設が整備され、海上にも大型汽船の進出が見られた。右近家は日清戦争（１８９４）前には新たに蒸気船を購入し、大量輸送の経営に転換し、小樽に右近倉庫を建設。いち早く近代船主への脱皮をはかった。

同じ時期、近江の藤野、西川らも製缶事業や農園経営など北前船経営からの脱却を模索してきた。一方大資本に対抗すべく10代目権左衛門は、北陸地方の有力な北前船主とともに北陸親議会を設立、さらに、明治29年（１８９６）には広海二三朗、西谷庄八、太田七平らと日本海上保険を設立する。右近権左衛門が日本海上保険の３代目社長に就任するとその後は右近一族が主体となる会社に発展させた。

日露戦争後、日本経済が不況になると右近家は、海運業に見切りをつけ、持ち船を売却し、その資本を不動産買収と開墾事業にあてるなど事業方針を転換し、明治42年（１９０９）に倉庫業も廃止した。（「小樽学」１２５号）

北陸船主らが創った日本海上保険は、昭和19年（１９４４）日本火災海上保険株式会社となり、２００１年には興亜海上火災保険と合併し日本興亜損害保険株式会社、さらに２０１９年には損害保険ジャパン日本興亜株式会社として今日に至っている。

海を臨む洋館

11代当主右近権左衛門（義太郎）が昭和10年に完成させた洋館は、遠く海を見渡せられ、海からは存在がよくわかるようにと山の中腹に建てられた。昭和大恐慌時の建設だったが、河野村、赤萩村の多数の人々を動員し、民間の不況時公共事業創出といえる「お助け普請」で建設されている。

平成27年（２０１５）、道路沿いに新設された「どっときたまえ」は、11代当主の新居として大正時代に建築された建物。「観光案内所」としてオープンし、施設内には自然にこだわった食材のごはんや「畝来（うら）」があり、本格手作りスイーツが自慢。三方よし研究所のメンバーは、船主の館の見学を堪能した後、貸し切り状態で豊かな食事をいただいた。

北海道開拓に挑んだ近江商人

建部七郎右衛門

父は六角佐々木氏の武将であったが佐々木家没落後は、士官への望みを持ちながらも、縁故を頼って柳川で半農半漁の生活を送っていた。

そのころ、同じ六角佐々木の遺臣田付新助が北海道に出向いたことが刺激となり蝦夷に向かい、寄宿した花沢館で蠣崎（松前）慶広との出会いがきっかけで、松前藩の後見人的な立場となり、やがて松前藩の中枢に参与して行政面での手腕を発揮したといわれる。蝦夷地に群生するアスナロ、エゾ松、トド松などの木材を持ち船で大量に本州に搬送したことから「材木屋」の屋号を持つ。それ以上の詳しい系譜についての資料はなく、北海道で商売など不明な部分が多いが、出身地柳川には屋敷跡を示す石碑が残り、大宮神社には材木屋（建部）が購入した「韋駄天丸」「自在丸」を描いた船絵馬が奉納されている。

田付新助

戦国時代は武士であったが、初代新助の父景輔の代で滋賀県彦根市柳川に帰農した。という。建部七郎右衛門と同年代ぐらいで何らかの相談があって北海道に渡ったものと考えられるが詳細は不明。柳川・薩摩の人たちと両浜組を組織し、場所請負人※として、場所請負制度の終焉まで12代目が北海道で活躍している。津軽の鰺ケ沢、福山（松前）にも支店を開いている。初代は寛永9年（1632）52歳で死去。彦根市柳川港には文久3年（1863）、田付家の子孫が築いた石積みの灯台が現存する。

西川伝右衛門

初代は江戸時代初期に行商から始め、寛文年間（1661～1673）に松前の城下に店舗を開設し、松前藩の御用商人となる。その後、和船を建造して北前船活動を展開。北海道と北陸・上方方面への産物回しを行って巨利を得、松前藩の漁場の場所請負制度ができると、優良な漁場の場所請負人となった。享保の頃には所有船舶が6艘を数え、海運業と漁業者を兼ねる城下町有数の大店となった。西川家の文書に「あらまき」の文字があり、シャケを塩漬けにして上方・江戸へ出していたことが知れる。10代目の西川貞二郎（1858～1924）は、祖先の北海道開発の事業継承を行うと同時に、明治時代には八幡銀行頭取、大坂商船筆頭株主、日本銀行大株主（第6位）として華々しい近代的企業活動を展開。カニ缶詰は外国で人気を博し、醒井養鱒場創設にも尽力している。近江商人の多くが北海道を去っていく中も「場所請負」「海商」として北陸船主らとともに最後まで北海道での事業継続を行ったが、忍路や小樽での類焼により明治30年代に撤退した。

岡田弥三右衛門

奥州へ行商に出掛け、さらに北海道をめざし、享保年間に場所請負人となって活躍。その漁場は23カ所に上る。漁場開拓と同時に、道路の開削工事を積極的に展開した。11代、12代岡田八十次は北海道以外での事業を積極的に展開し、樺太への進出、汽船の導入、炭坑の採掘、石綿事業の開始、農場経営など多角的な事業を興した。しかしながら、場所請負制度の廃止などの影響で明治34年（1901）に事業は破綻。しかしながらこれまでの功績に対して、13代岡田八十次に北海道開道50年功労者として追彰状が贈られている。

藤野四郎兵衛

初代は、農家に生まれ、寛政12年（1800）20歳で松前に渡り独立開業。松前からさらに奥地の釧路・十勝・根室方面の漁場を商圏とし、文政12年（1830）には、廻船事業に進出し北前船7隻を持つまでになった。2代四郎兵衛の子、辰次郎は明治20年（1887）に分家独立し、北海道開拓使が創設した根室の缶詰工場の払い下げを受け、サケ缶詰の製造を開始。明治24年（1891）には五陵北辰の商標を道庁より譲与され、一段と信用を増した商品の海外輸出を始めた。この時作られた缶詰は現在マルハニチロの「あけぼのさけ」として受け継がれている。

お助け普請で建てられた、豊郷町の旧宅は、永年、日枝村役場として使用されていたが、現在は民間企業が所有し「豊会館」として公開されている。

幕末以降に北海道に出かけた湖東商人たち

豊郷の藤野が北海道にやってきた頃から次第近江商人の入れ替えが進み明治30年頃には江差に湖東地方の商人が増加する。

代表的なのが大橋宇兵衛（能登川種）で、江差銀行や貯蓄銀行にも関係し、同族会社のウロコイチ大橋合名会社、江差米穀鰊取引所の大口投資家であった。大橋宇兵衛の海産問屋の建物は、重要文化財「旧中村家住宅」として江差観光の要となっており、周辺が文化ゾーンとして整備が進んでいる。その他には、山田喜代治、西澤久治郎、大橋宇左衛門、田口伊兵衛、上林九郎右衛門があげられる。

彦根市柳川に残る田付新助が建てた石積みの灯台

※**場所請負制度**：松前藩が行った制度で、武士が困難な漁場経営を商人が請負い、賃料を武士に支払う（運上金）というシステム。場所請負人となった両浜組を松前藩は保護したが、領地が幕府の直轄になった頃からほかの商人の勢力が増大し、両浜商人にかわって湖東商人が進出してきた。

出前講座

近江商人から学ぶ
三方よし流〝環境経営〟

高橋　卓也 氏
滋賀県立大学 環境科学部　教授
特定非営利活動法人 三方よし研究所 理事

三方よし研究所の会員として、今期は出前講座委員会（平田晃子委員長）に所属して活動しております。その一環として、２０１９年５月23日に電気硝子工業会さまの会合で講演をさせていただきました。以下の文章は、電気硝子工業会会報誌『電気ガラス・61号』に講演の内容を寄稿させていただいたものです（一部修正あり）。

現在、出前講座委員会では「三方よし」の普及のため、講師の養成に取り組んでおります。その第一段階として、講演の内容について再検討しております。この講演で私は、三方よしに私の専門である「環境経営（企業等がどのように環境問題の解決に貢献できるのか）」を掛け合わせた組み立てとしました。いわば、三方よし×環境経営、です。

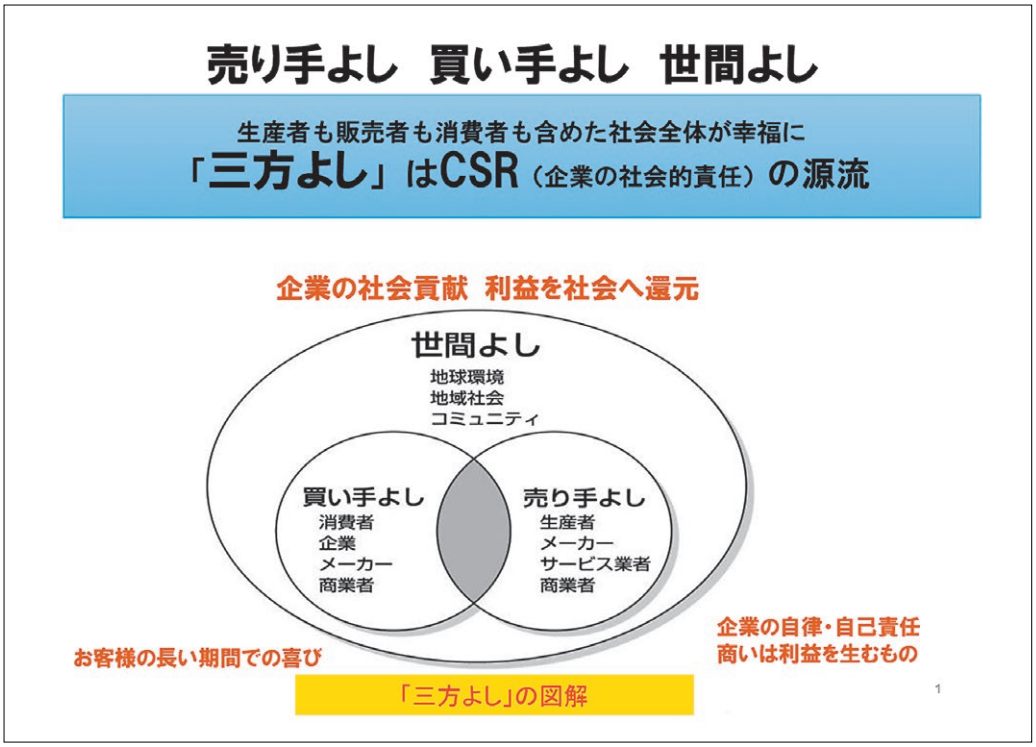
「三方よし（近江商人）」×「自分の専門・得意分野」。近江商人研究を本業としない者が自分の「土俵」に引き寄せて三方よしを語る方法としてご参考になれば幸いです。

はじめに

「売り手よし、買い手よし、世間よし」の「三方よし」は企業の社会的責任（ＣＳＲ）の日本における源流だと言われます。この「三方よし」をモットーとしていたとされる近江商人とはどういう人たちだったのでしょうか。そして、現代企業が学べることはどのようなことなのでしょうか。

私は愛媛県出身で滋賀県出身ではありませんが、滋賀県立大学で教員となり近江商人について学び、多くの人たちに知ってもらいたいと考えております。

専門は、企業の環境経営や森林政策・計画です。今回は近江商人と環境経営の間のつながりを発見してみたいと思います。



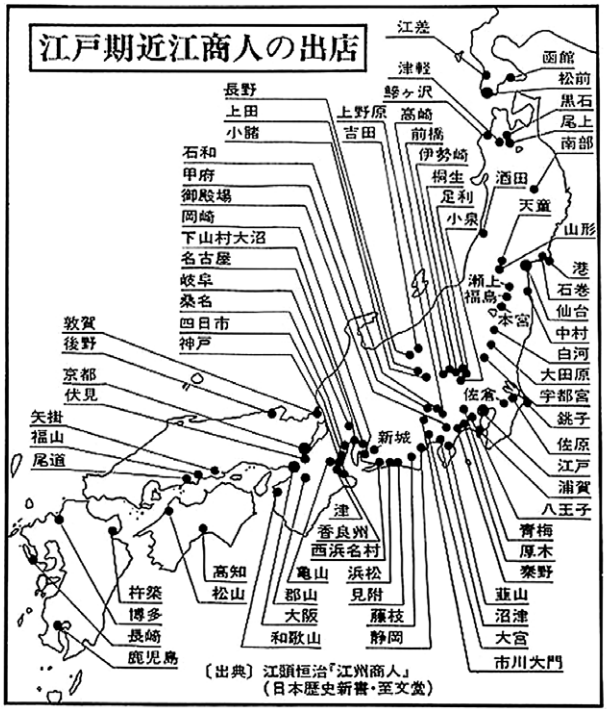
「三方よし」の図解

近江商人とは？

近江商人というのは近江、つまり現在の滋賀県の商人のことで、過去から現在までずっと存在したように思われるかもしれません。しかし、学術的には、江戸時代から明治中期にかけて本店を近江に置いて近江の国から出て全国的に活躍した商人のことをいいます。江戸時代より前の近江出身の商人や、明治以降、あらたな事業展開を行った商人については、近江の商人または近江系商人と呼んで区別しています。

江戸時代の近江商人は、幕藩体制のもとにあっても全国に雄飛したということで、きわめて特徴的であると言われております。北は北海道から南は鹿児島まで近江商人は出店を各地に展開しました。彼らは、他国に出店を出しても、従業員は近江の地元から採用をし、非常に郷土愛が強かったようです。

近江商人すべてが大成功をしたわけではないでしょうが、多くが全国的な展開を見せたその背景には、彼らの独特の経営システムがありました。



江戸期近江商人出店の全国地図

諸国産物回し

たとえば、鋸商いまたは諸国産物回しといって、全国各地から当時の経済先進国である京・近江に生糸、麻、紅花、水産物など主に原材料を北前船を利用して運び、京・近江からは、麻布、蚊帳、売薬、木綿、呉服などの製品を販売し、地域の価格差を利用して効率的に儲ける構想力がありました。

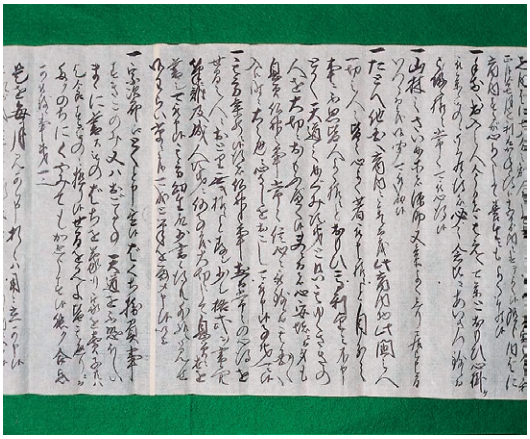
実力本位の人事システム

また、実力本位の人事システムが特徴的です。たとえば、近江で採用された丁稚さんは里帰りの際に一定水準に達しなければ出店に再度戻ることはできません（初登り）。番頭、分家の経営を任せられるには、里帰りを節目とした選抜がかかります（中登り）。経営者も安閑とはしておられません。たとえ跡継ぎでも能力が無いと見なされれば引退（押し込め隠居）に追い込まれます。

どうして「三方よし」？

近江商人は成功もしたでしょうが、藩が異なれば言葉も法律も違う江戸時代では、やっかみや誤解もあったろうと思います。そこで出てきたのが「三方よし」という考え方だと思います。他国の出身であるからこそ、地元に馴染まねばならない、という切なる思いがそこにあります。私は２００８年に中東のカタールで社会的責任についての国際学会に参加した折に、近江商人の三方よしについて説明しました。その時に言われたのが、外部出身の商人が進出先に配慮するというのは、アフリカでも東南アジアでも見られる、ということでした。ただし、「三方よし」という言葉自体は、明治以降に近江商人を紹介する際の便利な言葉として使われるようになったと言われております。江戸時代の文書にその考え方を求めるなら、現在の東近江市、五個荘の商人、中村治兵衛宗岸が孫に残した遺言書に左記のような内容があります。

「…たとえ他国へ行商にでかけても、自分のことよりも先ずお客さまのためを思って計らい、一挙に多くの利益を得ることを望まないで、何事も天の恵み次第であると謙虚な態度であること。ひたすら商品をお届けした地方の人々の事を大切に思って商売しなければならない。そうすれば、天道にかない、心身とも健康にくらすことができる。自分の心に悪心の生じないように、神仏への信心を忘れないこと。」（現代文にしております）



中村治兵衛宗岸の「家訓」三方よし理念の原点が記されているといわれる

陰徳善事の事例①　塚本定右衛門による山梨・滋賀での治山治水事業（写真：山梨県）

具体例としては、地元の橋建設や山の植林にお金を出したり、高値相場にあえて乗らず利益をむさぼらなかったり、といったことがあったとされています。「陰徳善事」といって、そうした社会貢献はあえて宣伝しないのが良いとされていましたが、山梨県の塚本山と呼ばれる美林や「けいおん！」で有名な、かつて東洋一の小学校と言われた豊郷小学校は、それぞれ近江商人やゆかりの人びとの貢献の足跡として、今に残っております。

近江商人から学べること

もちろん時代も状況も違いますが、近江商人から現代の環境経営が学べることを挙げてみたいと思います。「三方よし」だけからではなく、近江商人の経営自体にも教訓は盛りだくさんだと思います。

その1　よそモノとしての緊張感

自分の見知った人びとの間ではなく、知らない人びとの間で信頼を勝ち取るということは、企業が事業をするうえで大切な感覚のように思えます。地域社会に対する緊張感は環境対策を実施する上での大前提ではないでしょうか。

その2　こころを大事に

近江商人には信仰心の強かった人も多かったようです。信教の自由が保障される現代では、そのまま適用できないでしょうが、「こころ」というものを大事にする点は、環境経営に相通ずるところがありそうです。というのは、以前、私の研究室で環境経営に適合的な企業文化はどのようなものかについて調査したことがあります（Sugita & Takahashi, 2015）。結局わかったのは、外向きで、柔軟な文化のタイプ（「イノベーション文化」）の企業が日経環境経営度ランキングで多くの場合、上位に位置するということでした。環境経営も心から始まるのかもしれません。

その3　利益の共有

従業員の環境への取組みの意識づけには、どの企業でもご苦労されているのではないでしょうか。いくつかの近江商人は、従業員のモチベーション向上のため利益の三分法をとりました。利益が出た時は、資本への繰り入れ、従業員への利益配分、不慮への備え、の三つに配分したということです。従業員のやる気になるもとであったようです。環境への取組みも利益の共有があれば、従業員もやる気になるのではないでしょうか。

ここで面白い研究があります。やる気にお金は邪魔になるという研究です。たとえば、イスラエル・ハイファの六つの託児所で、お迎え遅れに対し罰金を科したところ、かえってお迎え遅れが増加した、という例です。経済的インセンティブ（罰金、奨励金など）がかえって道徳意識を害することがある、ということで、クラウディング・アウト（押し出し効果）と呼ばれています（ボウルズ、２０１７）。その一方、私のゼミ生の卒業研究での成果ですが、環境担当者のモチベーションの強さは、環境問題の深刻さの認識も影響するものの、むしろ環境関連業務の社業全体の中での重要性の認識がより強く影響するということでした（上村、２０１２）。お金よ

陰徳善事の事例②　丸紅専務古川鉄治郎による豊郷小学校の建設

陰徳善事の事例③　中井源左衛門による瀬田唐橋の架け替え工事

りも、むしろ仕事としての意義が社内でしっかり認められて自覚できることが大事だということかもしれません。

お客とも環境利益の共有はできるのではないでしょうか。経営学の巨人、マイケル・ポーターらは、CSV（Creating Shared Value; 価値の共創）として、経済的価値と社会的価値を同時に実現することを提案しています（ポーター＆クラマー、2011）。そうすればお客、さらには協力企業も巻き込めるかもしれません。

その4　会計の重視

日野商人の中井源左衛門家では、会計の仕組みとして貸借対照表と損益計算書を含む複式簿記の構造をもっていました。ヨーロッパとは別個に発展したものです。稲盛和夫氏は以下のように述べています。「もし、経営を飛行機の操縦に例えるならば、会計データは経営のコックピットにある計器盤にあらわれる数字に相当する。計器は経営者たる機長に、刻々と変わる機体の高度、速度、姿勢、方向を正確かつ即時に示すことができなくてはならない。そのような計器盤がなければ、今どこを飛んでいるのかわからないわけだから、まともな操縦などできるはずがない。」（稲盛、2000）経営には会計が重要です。環境経営もそうでしょう。そのための環境会計には、環境報告書やCSR報告書に記載して組織外のステークホルダー（利害関係者）に知らせるための外部環境会計だけではなく、マテリアルフローコスト会計やライフサイクルコスティング等の手法があります。

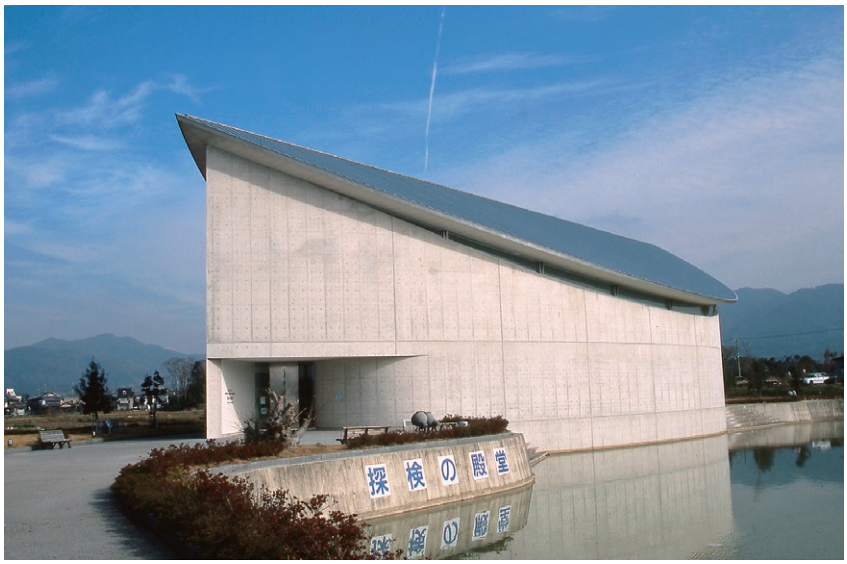
その5　長期的視点

昨年2018年には『気候変動に関する政府間パネル（IPCC）1・5℃特別報告書』が公表され、地球の気温上昇を1・5℃以内に抑えるべきこと、そのためには急激に二酸化炭素の排出を削減すべきことが分かっています。しかし、これができていないのはなぜでしょうか？要するに、これは「先のことだから」という私たちの短期志向のなせる業だと思います。近江商人は先祖と子孫のことを考えて仕事をします。環境経営にも突き詰めれば、こうした視点が必要でしょう。以下は近江商人たちのことばです。

「貧も富も我一心にあり、悪心起らば家を保つこと能はず、家を我子に譲るまでは、僅かに三十年なり、其間は謹んで奉公の身と思ふべし」
五個荘　中村治兵衛宗岸の「家訓」（宝暦四（1754）年）より

「先祖の御位牌は即ちおはしますと心得て、…吾は即ち先祖の手代なりと思ふべし」
近江八幡　伴家の家訓　（『主従心得草』）

いずれも（滋賀県AKINDO委員会、2003）



西堀栄三郎記念館「探検の殿堂

近江商人の流れを継ぎ、南極地域観測隊第1次越冬隊長であった西堀榮三郎の出身地東近江市横溝にあり、西堀榮三郎記念室、探検家の殿堂を有し、様々な探検メニューを提供している。未知の世界に挑み、人類の知的財産となるレポートを残した探検家を顕彰することで、探検に不可欠な「パイオニア精神」と「創意工夫の心」を21世紀を担う若者に伝え、青少年の探検・探求心を涵養する場となることを目的に建設された。

住所：東近江市横溝419番地
HP：https://e-omi-muse.com/tanken-n/index.html

さいごに

近江商人についてご関心を持たれましたら、ぜひ水と緑豊かな近江の風土のなかでその足跡、息遣いに触れていただければと思います。近江商人の街並みが残る五個荘、近江八幡、日野や関連博物館（近江商人博物館、近江商人郷土館、近江日野商人館）はいずれも電気硝子工業会会員の日本電気硝子さまの能登川事業場の近くです。もともと工業会のみなさまは真空管も作っておられたとうかがいました。東近江市にある「探検の殿堂」では第一次南極地域観測隊越冬隊長の西堀榮三郎氏を顕彰していますが、彼は東芝で技術者をしていたころ、初の純国産万能真空管「ソラ」を開発したそうです。彼の「創造力」「開発力」にも学べるでしょう。三方よし研究所のウェブサイト（http://www.sanpo-yoshi.net/）もご参考にしていただいて、滋賀の地においでになるのをお待ちしております。

［参考文献］

稲盛和夫（2000）『稲盛和夫の実学：経営と会計』日経ビジネス人文庫

上村礼子（2012）『環境活動に対するモチベーション維持・向上の要因及び手法に関する研究』（2011年度滋賀県立大学環境科学部環境政策・計画学科卒業論文）

滋賀県 AKINDO 委員会（2003）『現代に生きる三方よし：「世間よし」の理念は新しいビジネスモデル』滋賀県 AKINDO 委員会、p.52 ～ 53.

Masaki Sugita, Takuya Takahashi（2015）Influence of Corporate Culture on Environmental Management Performance: An Empirical Study of Japanese Firms, Corporate Social Responsibility and Environmental Management 22 (3): 182 ～ 192.（企業文化が環境マネジメント成果に及ぼす　影響：日本企業の実証的調査）

サミュエル・ボウルズ（2017）『モラル・エコノミー：インセンティブか善き市民か』NTT 出版、第1章および第3章

マイケル・E・ポーター、マーク・R・クラマー(2011)「経済的価値と社会的価値を同時実現する共通価値の創造」DIAMOND ハーバード・ビジネス・レビュー論文

出前講座のご案内

三方よし研究所は、滋賀県 AKINDO委員会が行ってきた近江商人の経営理念普及活動を引き継いで2004 年に設立しました。AKINDO委員会では大規模な講演会を開催してきましたが、NPO法人三方よし研究所では、こちらから皆さんのほうに出かけてそれぞれのお立場で有効な近江商人に関する講演や勉強会のお手伝いを「出前講座」と称して開催しています。近年は中国・韓国からも「三方よしの経営を学びたい」「長寿企業の秘訣が知りたい」というご要請があり、海外の事業家の皆さまにもお話しをしています。

三方よし研究所のメンバーの多くが自らも事業活動をしていますので実態に即したお話も可能です。

会合の趣旨に対応した内容で、お聞きいただく皆さまの心に響く、何らかのお役立ち情報のご提供を心がけております。近江商人の経営に学び輝く未来に向けて進みましょう。

〈お問合せ先〉
特定非営利活動法人　三方（さんぽう）よし研究所
〒522-0004　滋賀県彦根市鳥居本町 655-1
Tel：0749-22-0627　Fax：0749-23-7720
E-mail：office@sanpo-yoshi.net

彦根の重伝建地区に残る 実業家・石橋彦三郎の旧宅

城下町彦根の通称花しょうぶ商店街を抜け、芹町のほぼ中央、中山道と彦根城下を繋ぐ彦根道の北側に旧石橋彦三郎邸がある。平成28年、彦根市で初めての伝統的構造物群保存地区の指定を受けた河原町・芹町地区の街並みの中心的な建造物で、登録文化財の指定を受ける。

保存地区は、ゆるやかにS字を描く幅二間（約3・6メートル）程度の往来に沿った約780メートルの範囲で、短冊形に割られた敷地が並び、芹川の流路を付け替えて城下町を整備した名残りをよく残している。

彦根市の重要伝統的建造物群保存地区（彦根市ホームページより）

小樽で事業に成功

石橋彦三郎氏は、安政2年（1888）彦治の5男として彦根町に生まれ、大阪の穀物商に奉公する。20歳の時、実兄を頼って北海道小樽にわたり、呉服・太物・荒物などを中心に扱う商売を行い、明治15年（1882）27歳で北海道には特産の大豆が多いことに着目し、醤油醸造所を開設。苦心の末、野田のキッコーマン、上州のキッコーショウユと並んで日本の醤油御三家のひとつに数えられ、北海道はほぼ独占。

彦三郎は、惜しげもなく自らの研究の成果を同業者にも公開していったので多くの事業家が生まれており、石橋の元で醸造業に取り組んだ野口吉次郎は「北の誉」の創業者である。石橋は醸造のほか、原野を譲り受けての水稲栽培や未開地の開墾などを進めるも53歳で彦根に戻り、大正5年（1916）61歳で第12代彦根町長になる。彦根町において、実業家出身の町長は初めてのことであった。事業を引き継いだ時には第百三十三銀行（現滋賀銀行）の監査役に就任しており、大正5年（1920）、全国の50万円以上の資産家が掲載される時事新報社第3回調査においては、伊藤忠兵衛300万円、西川甚五郎200万円についで120万円の資産家であった。

旧石橋彦三郎邸

石橋彦三郎旧邸が平成24年彦根市に寄付

彦根市に寄付された建物は、明治時代後期に石橋氏の住宅兼店舗として建てられたものであり、敷地1200㎡に西・中央・東の3棟の店舗兼住宅が建ち、土蔵4棟と倉庫1棟を含む建築面積は698㎡。これまで、この建物は、昭和26年に石橋氏が設立した千歳共済会が管理していた。

お　知　ら　せ

伊藤忠青山アートスクエア常設展で「すごろく旅―伊藤忠兵衛・三方よしの軌跡」開催

昨年８月20日から、伊藤忠商事の地域貢献の拠点「伊藤忠青山アートスクエア」において創業者初代伊藤忠兵衛の商業観「三方よし」と伊藤忠商事の１６０年のあゆみを楽しみながら学べる展示が始まりました。本企画には三方よし研究所も少しお手伝いをしたことでオープニングには理事長、田中恵里子事業委員長が参加。オリンピックイヤーの本年、来日される海外の方にも日本の心を伝えようとされています。

オープニングであいさつをする塚本喜左衛門理事長

すごろく旅のちらし（※３月末まで休館。詳細は伊藤忠商事ホームページなどでご確認ください）

窪田和美さんが『近江商人の生活態度―家訓・倫理・信仰』をご上梓

三方よし研究所会員で龍谷大学短期大学部教授の窪田和美さんが、表記のご著作を出版されました。本書では、「なぜ近江という特定の地域から独自の価値観を身に着けた商人集団が生まれたのか、しかもなぜ、近江出身の商人集団が「近江商人」という呼称を冠せられ、注目されたのか、そこに焦点を当てて取り上げたい」とされ、その解明に、かれらの生活態度の背後にある価値観や文化・宗教が大きく影響していることを紹介されています。

窪田先生には本年度総会でご講演いただきます。ご期待ください。

法蔵館発行　定価3.500円

令和２年 三方よし研究所総会

【日時】
令和２年６月20日(土)
15：00～

【場所】
疏水亭（大津市三井寺町）
TEL.077-522-3057

【講演会】15：30～
「近江商人の生活態度」
講師：窪田和美 氏

本年の三方よし研究所　事業のごあんない

本紙では、北海道と近江商人に焦点を当てましたが、本年度に事業委員会では小樽への研修旅行を予定しています。

講演会「蝦夷地と近江商人」

日時　2020年８月２日(日)
　　９：15　能登川駅集合

場所　豊郷町金亀岡村本家、豊会館他
　　バスで周ります

講師　青柳周一 氏（滋賀大学経済学部附属史料館館長）

小樽・江差研修ツアー

日時　2020年10月10日(土)～12日(月)

行程
１日目：伊丹空港→新千歳空港→小樽市内見学→講演
　　講師：菅原慶郎 氏（小樽総合博物館学芸員）
２日目：小樽→ウポポイ（民族共生象徴空間）→江差
３日目：江差→函館→函館空港→伊丹空港

12月頃に報告会を予定しています。

てんびん棒

伊藤忠商事本社横にある、伊藤忠青山アートスクエアでは昨年夏より、「近江商人すごろく旅」展が開催されている。創業者伊藤忠兵衛の経営理念とともに伊藤忠商事の足跡や近江商人が求め続けてきた理念をわかりやすく、しかも楽しく展示されている。

三方よし研究所や塚喜商事株式会社様も今回の開催に少々お手伝いができたことから理事長らがオープニングに参加。当研究所が少しでもお役に立てたことはうれしい。

昨年、末永國紀先生の『近江商人学入門』が英訳されたことで、一段と「三方よし」の理念が広がっていくのではないかと大いに期待しているところだ。かつて、ＣＳＲの源流といわれてきたが、いまやＳＤＧｓの源流三方よしといわれるようになってきた。こうした追い風の中、三方よし研究所では「三方よし」の語り部の育成に励んでいる。予期しない状況がおとずれるなど、順風満帆ではない社会の中で普遍的なビジネスの精神を正しく伝えていくことが三方よし研究所の最大の使命であるとの強い意志で促進していきたい。読者諸氏の各段のご支援をよろしくお願い申し上げます。

第45号
発行／特定非営利活動法人三方よし研究所　〒522-0004　滋賀県彦根市鳥居本町六五五―一　TEL〇七四九(二二)〇六二七　E-mail office@sanpo-yoshi.net　URL http://www.sanpo-yoshi.net/